

7月12日（日）主日礼拝レジュメ

「人生の終わりをどのように迎えるのか」 使徒の働き 7章54～60節

ステパノは、最高法院にいた人たちに対して預言者を迫害し、正しいお方イエスを殺したことは、まさに神と神のみこころに逆らう罪だと言ったが、それに対して人々の怒りは最高点に達しようとしていた。つまり、決して彼らは自分の罪を認めようとはしなかった。

56節で、ステパノは、神の栄光と神の右に立っておられるイエスを見るという特別な体験をした。彼は、56節で「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。」と言った。ここでステパノは、なぜイエス様を人の子と呼んだのか。それは苦難のメシヤであると同時に栄光をお受けになるメシヤだということ。

- ① ルカの福音書9章22節「そして、人の子は多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日目によみがえらなければならない、と語られた」

人の子としてのイエス様は、苦難のメシヤとして全人類の罪の贖いのために十字架にかかれ、苦しみ、血を流し、いのちを捨てられると同時に、三日目によみがえり、天に昇られ、栄光のうちに神の右の座にお就きになることを意味している。そして、ステパノが人の子としてのイエスを見たのは、彼自身がイエスと同じ道を歩もうとしていたからであった。ステパノを、周りの誰も受け入れなかったが立っておられるイエスは、彼の生き様と大胆な証しを受け入れられた。私たちも信仰生活においてイエスに受け入れられるか、人に受け入れられるかの二者択一を迫られることがしばしばあるが、その場合イエスに受け入れられる者でありたい。そして彼にはイエスの御前に受け入れられる確信があった。

59、60節に記されているステパノの言葉は、主イエス様の十字架上での言葉を思い出させる。

ルカの福音書23章46節でイエス様は十字架の上で「父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。」と言われて息を引き取られた。

ルカの福音書23章34節で「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」

申命記21章23節「木にかけられた者は神にのろわれた者だからである。」

ユダヤ人は、イエスは自らの罪により十字架にかけられ、しかものろわれた者と考えていた。しかし、使徒を始め初代教会の人たちは、イエスを神の御子、神と信じていた。

60節でステパノは、「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」と祈った。十字架の上でのイエスの祈りが思い出されたかもしれない。またステパノが神に逆らうユダヤ人のために悔い改めを願って祈り続けていた可能性もある。その祈りが死の間際になって、あのような言葉となって現れたのかもしれない。

「こう言って、彼は眠りについた。」単に死んだとは言わず、眠りについたとの表現により、安息に入るとか平安のうちに死を迎えたとの意味が含まれている。信仰によって私達も眠りにつくような人生の最後を必ず迎えることができる。

ステパノは59節で「主イエスよ、私の霊をお受けください。」と言ったが、聖霊に満たされ、聖霊の導きに従い通したステパノは、最後まで神のみこころに従い通したことから来る確信と平安により、すべてを神の御手にゆだねるかたちでこのように言うことができた。

どのような死を迎えるかは、私たちがどのような人生を歩んできたかによって決まる。また、私達たちは死に臨んで何を思い、どのような言葉を口にするのだろうか。